

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520280

研究課題名（和文） ステファヌ・マラルメの演劇論と「共和国」の関係についての研究

研究課題名（英文） Study on the relation between 《 Republic 》 and Mallarmé' s theater aesthetic

研究代表者

中畑 寛之 (NAKAHATA HIROYUKI)

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：70362754

研究成果の概要（和文）：本研究では、ステファヌ・マラルメの演劇論を当時の演劇状況および社会・政治状況のうちに置き直し、新たな視点からの読解を試みた。具体的には、同時代の劇評家たちの評言と突き合わせ、また批評対象となった作品を実際に読み、新聞・雑誌等に掲載された版画等の補助資料も用いながら、舞台を観る詩人のまなざしの特異性を明らかにしようとした。これと並行して、19世紀末パリで上演された芝居の基礎情報とマラルメが「演劇に関する覚え書」で採り上げている作品を論じた他の劇評の電子化を行い、データ・ベースを構築した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we propose to analyze the dramatic theory of Stéphane Mallarmé from a new perspective, by replacing it in the theatrical, social, and political situation at the time. More specifically, we try to clarify the peculiarity of vision of Mallarmé, by comparing the texts of this french poet and other dramatic criticism in those days. And also, by reading plays intended to his comment, and the use of engravings published in magazines or newspapers. In parallel, we built the database of the performance in Paris of late 19th century and theater reviews addressed the same works that Mallarmé had seen (or read) and criticized.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：ステファヌ・マラルメ、フランス第三共和制、19世紀末、演劇、データベース

1. 研究開始当初の背景

世界的にも優れた成果をあげている、日本の研究者によるマラルメ作品の翻訳・註解およびその研究は、先般「第一巻 詩・イジチュール」の配本によって遂に完結した筑摩書房刊『マラルメ全集』（全5巻、1989-2010）に結実していると言えよう。本研究が扱おう

とする課題についても、「第二巻 ディヴァガシオンその他」に収録された渡邊守章氏によるマラルメ演劇論の解題と註解が、その詳しさだけでなく、氏の演劇的経験と鋭い読解力に裏打ちされたひとつ全体像をみごとに描き出している。

我々は、読書会の場を設け、『ディヴァガ

シオン』(1897)に収録された演劇論のプレ・オリジナルにあたる劇評「演劇に関する覚え書」(1886-87)を集中的かつ多面的に読むまたとない機会を得たが、その際にも渡邊氏の読解、文献学的なデータ、そして同時代演劇についての注釈を参照することがしばしばであった。氏の仕事は、その射程の広さと綿密さにおいて、なによりも、新書館から刊行された『舞踏評論』(1994)の解題で氏自身が夙に記しているとおおり、「演劇についての問題意識が、具体的にはどのような舞台と出会うことで、マラルメ固有の問題として形成されるに至ったのか」という論点において特筆すべきものである。

しかしながら、それはあくまで『ディヴァガシオン』に収録されたマラルメ演劇論に対する註解である。つまり、1897年に刊行されたこの散文集に収められた諸テキストをひとつの「決定稿」と見做し、決定稿以前の状態との比較という立場から概ね成されている。もちろん、86年から87年に書かれた初出、91年『パージュ』、および93年『詩と散文』におけるヴァリエーションなどもきちんと押さえているとはいえ、翻訳の註解という制限があるゆえに、我々にとって時に不十分、そしてどんなに優れた仕事であっても細部にわたって完璧に網羅し尽くすというものはあり得ない以上、時に欠落がある。本研究はその欠落を出来得るかぎり埋めてゆく作業をもって始まるものであるが、マラルメ演劇論へのアプローチとしては渡邊氏とは決定的に違うものとなるであろう。

我々は平成17-18年度の科学研究費補助金の助成を受けた研究「ステファヌ・マラルメを中心とする19世紀末フランス第三共和制の〈危機〉の諸相研究」において、詩人が1890年代に発表した幾つかの「批評詩」を採りあげ、それがいかなる戦略をもって書かれているかを分析し、亀裂の走る脆弱なフランス第三共和制の社会的基盤を再編しようとするマラルメの行動の狙いとその有効性を明らかにしようとした。その際、この慎み深く礼節を知る詩人をそのような「行動」に駆り立てた背景にはアナキズムの爆弾テロがあることを我々は示したわけだが、実はそれ以前から、つまり1871年、普仏戦争とコミュンの動乱によって廢墟と化した首都パリに出てきて以来、マラルメは「共和国」のあり方を詩人の立場から見つめ直していたのではないかという疑問が湧いた。とりわけ、80年代の演劇評で繰り返される文明批判と来たるべき〈祝祭〉に対する期待、そして1889年の万国博覧会の決定的な落胆とが、社会の〈危機〉を観察する際のマラルメ的まなざしを形成していったのではないかと考えるようになった。今回、時代を逆行するようななかたちで、80年代の、しかもマラルメの

「演劇論」を研究課題に選んだ理由は、90年代のマラルメの仕事をもより広い視野からあらためて見直すためでもある。

2. 研究の目的

本研究は「演劇に関する覚え書」(1886-87)を出発点とし、『ディヴァガシオン』(1897)へと至るマラルメ演劇論の成立と編成とを通時的に捉える視点を持つと同時に、それらの劇評が書かれ、演劇論として要約され、纏められ、また解体されるそれぞれの時期における、その目的・効果などを、同時代の演劇・社会状況やマラルメの演劇観の進展・洗練を視野に入れながら、共時的にも考えようとするものである。前出の渡邊守章氏の仕事が詩人のテキストから抽出される「未来の祝祭演劇のパラダイム」を明らかにしようとする理念的なものへと向かっているのに対し(Thierry Alcolombreの優れた研究もその系列に位置づけられるであろう)、我々はあくまで実際に舞台上演された(もしくは本で読まれた)作品との批評的格闘によって生成・展開するマラルメのエクリチュールに焦点を当てるとともに、「演劇に関する覚え書」が濃厚に有していた社会・政治批判的な側面を詩人の演劇論においても強調する。「社会的矮小化の代償として〈国家〉に要求する権利」として演劇を捉え、詩人として精察していたマラルメは、1885年以降ようやく機能し始めた第三共和制に対する期待と失望を、演劇の批評を通して、演劇の問題に限定して語っているのであり、その劇評には「犠牲の論理」を国民に押し付ける国家、すなわちエルネスト・ルナンが指し示すような国民国家に対する〈人間〉としての正当な権利要求という側面があるのではないかと。そして、社会における演劇の必要性を詩人はどのように主張するのか。我々はマラルメの演劇論を単に美学的・哲学的にだけ読むのではなく、社会的・政治的にも読み得ると考えている。

舞台芸術に対するマラルメの関心が決して一時的なものではなかったこと、それどころか、終生、彼は言葉の広い意味において〈演劇〉というものに興味を持ち続け、考えを巡らせていたことはよく知られている。この詩人の思考は通常イメージされる演劇ジャンルの枠に収まるものではなく、そういった境界を軽々と跳び超え、いわば劇場の壁をすり抜け、オルガン演奏会や教会のミサ、さらには大道芸までもを呼び込んでいくのであり、その触手は万国博覧会といった国家プロジェクト・都市的祭典にまで伸びていく可能性を秘めていた。そのあり方をマラルメは〈詩人〉が祭儀を司る〈祝祭〉という観念のもとで模索している。また、マラルメ晩年の「批評詩」は文明論的・社会学的などの多面性・複雑さを備えているが、書くという

詩人による行動がそのような襲をそれ自体のうちに加えていったのも、まさに舞台芸術を論じることに始まっているのである。その文学的出発における劇場からの拒否に始まり、1870年代の壮大な民衆演劇の構想とモード雑誌の編集、〈祝祭〉という概念を発展させていく80年代の演劇論を経て、実は90年代に書かれたテキストもほとんどすべて、この〈祝祭〉という考えによって裏打ちされているとさえ言える。

マラルメの演劇論を当時の上演データや劇評との関わりにおいて実証的かつ包括的に研究したものは、渡邊守章氏による註解以外にはない。2003年に刊行された新ブレイヤード版『マラルメ全集』もこの点に関してはいまだ不十分なものに留まっている。渡邊氏の『マラルメの演劇』刊行が待たれる所以であるが、本研究は筑摩版『全集』によってなされた仕事を背景に、さらに綿密な資料を、同時代の劇評家たちの言説との差異をも含めて提示しようとするものである。ただし、マラルメの演劇論を、当時の政治・社会状況を視野に入れ、第三共和制の進展を背景にした国民国家論を絡めつつ、やはり「出来事の現場」から読解しようとするところに、我々の試みは、マラルメ研究のこれまで探索されたことのない方向を求めている。

3. 研究の方法

本研究ではマラルメの〈祝祭〉論の核のひとつであり、しかも逆説的な核となっているワグナー論と、上述したような拮抗を準備することになる1886年から87年に書かれた演劇評を中心に採りあげる。『ワグナー評論』誌の編集長であった友人デュジャルダンの懇請により1885年に書かれたマラルメのワグナー論は、当時のワグネリスムの隆盛を横目に、ドイツの音楽家からの「奇妙な挑戦」に対するフランス詩人の応答として読めるテキストだが、その傍らにフィヒテとルナンの国民国家論をおいて読み直すことができるようにも思う。「演劇に関する覚え書」に関しては、実証的な分析を基に、また同時代の批評家たちの言説との偏差を考察しつつ、ワグナー論で提示されたマラルメの〈祝祭〉概念が現実の舞台を見ることによっていかに展開されていくのかを解明する。

マラルメの劇評は舞台上演に対する単なる批評にはとどまらないことはすでに述べた。不平を零し、絶望しながらも、彼がつねに劇場へと引き戻されるのは、他でもなく、そこが「神秘へと開かれた壮麗な入口」だからであった。「美の公の展開に参加することからはすべて排除されている」という詩人は、それゆえ、演劇というものが真に果たすべき機能を国民・大衆に気づかせるために、舞台

上演について、そして劇場と書物の関係について、美学的にだけでなく、つねに社会的・文化的にも問い続けるのである。『ディヴァガシオン』では抹消されてしまう批評現場でのアクチュアリテ、すなわちそこに書き込まれた同時代の演劇状況についての具体的な言及、直接的な言葉の数々、時にはこの温厚な詩人にしてはめずらしく激しい口調の批判はいったい何に由来するものなのか。詩人が求める〈劇場〉の建造を（物質的にも、理念的にも）等閑に付す「文明」に対し、そして自らが生きる「世紀」、芸術の「空位時代」といわれるその時代に対し、厳しいまなざしを投げ続けた批評家としてマラルメは、何を見据え、何を目指していたのか。本研究が浮かび上がらせるのはそのような詩人の姿であり、国民国家を基礎づける〈フィクション〉としての詩の在り方である。

我々は本研究に必要な基礎データ、すなわち1870年代から90年代のパリにおいて上演された芝居および演奏会等の資料を作成した（これは書簡集その他の資料からマラルメがその生涯において観た、あるいは観たであろう芝居の網羅的なデータ・ベースへと発展させたいと考えており、本研究終了後も随時データの更新を行う）。具体的には、Librairie des Bibliophilesから刊行されていたSoubliesの*Almanach des spectacles* (1874-1913)の情報を中心に、まずは1880年代パリでの上演情報を電子化し始め、同時に本研究のために収集・参照した他の資料によって随時上演データを補っていく。とくにマラルメが劇評を書いた1886-87年のシーズンに関してはどんな芝居が上演されたのか、詩人はどの作品を観、観なかったのか、そしてそのうちのどれをいつの劇評で採りあげたのか、採り上げなかったのかを一目で確認することのできる資料を作成する。それと同時に、マラルメが論じている芝居を他の批評家たちはどのように観ているのか、できるだけ多くの劇評を収集し、データ・ベース化を行った。纏まった劇評として1875年から1918年ぐらいまでをカバーしているEdouard NoëlとEdmond Stoulligの*Les annales du théâtre et de la musique*が参考になったが、それに加え、当時の演劇雑誌に掲載された劇評を丁寧に拾い集め、それらとの対比においてマラルメの劇評を読み直していく。この作業によって、同時代演劇を観る彼のまなざしの独自性が、そして彼の劇評のエクリチュールの特異性が浮かび上がることが期待される。その成果を踏まえ、ジャン、サン＝ヴィクトワール、バンヴィルら先達の劇評、とりわけゴーチエの演劇評との「隔たり」、マラルメ自身がきわめて意識的であったその「隔たり」を明確にしようとする更なる読解を進めていく。

また、詩人の演劇論においてなにが問題になっているのかを理解する一助とするため、書かれたテキストだけではなく、当時の芝居を描いた版面や雑誌の挿絵など、視覚映像によってもマラルメの観た芝居を具体的に再現するための資料収集もおこなった。

「演劇に関する覚え書」で参照される作品を実際に読み、また図版資料等を利用して、我々もまたマラルメが実際に観たであろう舞台を念頭におきつつ、そのテキストを読み直していく。たとえば、マラルメのバレエ評をディアギレフ以降を知る我々の目で読んでいては見落とすものが多いであろう。我々もまた、19世紀末の劇場に足を運ばなければならないのである。

『ディヴァガシオン』に纏められる際に削除されてしまう部分にも照明をあて、その理由を多面的に考察してみたい。これまでもマラルメの演劇論を論じたものはいくつかあるが、そのほとんどが『ディヴァガシオン』所収のテキストによっているため、削除された箇所を真面目に論じた研究はない。決定稿というパースペクティヴからマラルメのテキストを読んでいる限り、その時々成形したテキストそれ自体の表情を捉えることはできまい。さらに言えば、『ディヴァガシオン』でさえ、過渡的なテキストであったかもしれない以上、我々は詩人のテキストに絶えず生成論的なまなざしを注ぐ必要があるだろう。

そのための一助として、我々は『漆の抽出し』『パージュ』『詩と散文』の台紙貼付け見本 (maquette) を詳しく調査し、それらの批評校訂版を作成することにする。

4. 研究成果

1886-87年および90年代に書かれたマラルメの演劇評を同時代批評家の言説および戯曲テキストや図版資料等と付き合わせて読むことで、実際の芝居がどのようなものであったかをイメージしながら、実際に上演を観ている（もしくはテキストを読んでいる）詩人がどのような地点に批評的なまなざしを向けているかを炙り出した。他の劇評家がいかなる立場から記事を書いているのかを忖度する必要があること、また入手できる文献の量と質が上演によってまちまちであることなど、すべてにおいて同じ質と客観性が保たれているとは言えないかもしれないが、少なくともマラルメの選ぶ批評的な位置を相対化して考察することは出来たと思う。特に当時の上演風景を描いたもの（イラストや版面）は、詩人が実際に観たであろう舞台の光景をイメージすることを可能にさせるという意味で、現場性・一回性を強く帯びる演劇上演の批評を読み直すうえで有効な補助資料であることが改めて確認された。

また、マラルメの演劇観の進展とその社会的立場づけ、そして彼の詩作（特にエロディアド詩篇）との関わりも再考することができた。本研究から派生した成果ではあるが、「声と身体の間 ― ベケット、マラルメ、ジャリ」と題した発表において、マラルメ演劇論の立場からベケット、ジャリの仕事を検討すると同時に、彼らの試みを通してまなざしでもって、すなわち20世紀演劇における上演の演出的かつ技術的試み・発展を経たあとの視点から、「エロディアドの婚礼」を遺した詩人による演劇の可能性を問い直すことができた。

主要な成果としては、後期マラルメの出发点を画す彼のワグナー論を採りあげ、日本フランス語フランス文学会の秋季大会の場で学会発表を行い、「リヒャルト・ワグナー ― あるフランス詩人の夢」に現れてくる「国家」「国民」といった政治的側面の読解を試みた。その後論文にまとめ、拙著『世紀末の白い爆弾 ― ステファヌ・マラルメの書物と演劇、そして行動』（水声社、2009）に組込んだ。「演劇に関する覚え書」のエクリュールには、1890年代に遙かに多面展開される詩人の〈行動〉の種があちこちに播かれ、すでに芽吹いているが、それはとりわけワグナーを召喚する批評=危機の場に見出される。パナマ事件やアナーキストの爆弾事件などが演出する国家の危機を舞台に、政治と言語の問題（より正確には言語の政治学というべきもの）を通して、文芸 (lettres) に宿る〈フィクション〉の力を読者 (public) に意識・認識させ、言語=文字 (lettres) への信を取り戻させることで、人間の社会的基盤を再編しようとする批評詩の試みへと発展していく批判精神がそこに見出せる。ワグナーとは、『ディヴァガシオン』の著者にとって、その思考の賭金として、美学的だけでなく、政治・社会的にも重要な存在であったことを論じた。この論点を実証するためには、同時代のワグネリズムの展開において産出された諸テキストをマラルメのワグナー論と突き合わせる必要性を我々は主張したが、それは同時に、「出来事の現場から」という我々の研究姿勢が有するある種の有効性を示すことにもなったと考える。また本論では、演劇というものの社会的・宗教的役割を意識させた重要な存在としてワグナーを位置づけつつ、彼の神話の扱い方を批判する詩人の手つきから、マラルメ的共同体がいかなるものであり得るかという問いへと論を進めることができた。

マラルメが観た芝居に関する上演データについては、ひとまず、その概要と他の劇評家たち (Stoullig, Saint-Môr, Raoul Toché など) によるテキストを《Spectacles vus par le poète》としてHP上で公開した。そ

これらの劇評と劇作品それ自体とを併読することで、同時代における詩人のまなざしの特異性、その目指す地点が実証的に確認できるようになったはずである。さらには、詩人のバレー論を考察するうえで欠かせない『ヴィヴィアーヌ』およびエデン劇場に関する貴重な文献から、我々は彼の劇評に新たな照明を当て得る足場を得た。これからも文献資料の補足を続け、同時代演劇とマラルメの関係を見定めていきたい。

『漆の抽出し』(未刊)、そして『パージュ』(1891)および『詩と散文』(1893)をそれぞれ出版するにあたってマラルメが作成した台紙貼付け見本(maquette)の現物をパリのジャック・ドゥーセ文学図書館において実際に手に取り、その作業の現場を確認した。とくに86年から87年にかけて書かれた劇評「演劇に関する覚え書」がそれらの著作においていかに編集・統合・分解されていくのかを、切り貼りされた校正刷・雑誌初出のテキスト、またマラルメ自筆の書込み等から追うことができた。これらマケットに関しては本研究期間中に繰り返し検討し、最終的に詳細な研究資料を作成することになった。

『詩と散文』に関しては、マケットの生成批評版を完成させることができた。予想以上にさまざまな雑誌(あるいは校正刷)からの切抜きによって構成されており、それらの特定には至らなかったが、演劇論として提示された「第二ディヴァガシオン 祭式」については詩人によるテキスト(再)編成の手つきが具体的に確認でき、有益であった。『漆の抽出し』『パージュ』に関してはまだ不十分な箇所が多く、未完成であるが、今後も手を入れ、完成させたい。

以上の研究資料は複雑なテキスト編集を経ていくマラルメ演劇論の展開および自らの本を作る際の詩人の手つきを概観するために今後不可欠な資料となるであろう。

さて、正直に告白するならば、この研究期間中は専ら、マラルメの劇評の対象となっている諸作品、それを批評する他の劇評家たちのテキスト、そして19世紀末フランスに係わるさまざまな資料の蒐集、整理、そして読解に終始することになり、論文としては研究成果を纏めることがほとんどできなかつたと言わざるを得ない。膨大な資料をまえに途方に暮れることになったわけだが、我々の問題設定と方向性自体は間違っていないという確信だけは深めることができた。今後もマラルメの演劇論については継続して研究を進め、論文として成果を発表して行くことを約したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 中畑寛之、ブティックと(駝鳥の)卵 — ジャリとマラルメの文学的系譜に関する予備考察、『EBOK』第22号、2010、157-179、査読有
- ② 中畑寛之、私は未知なるものを待っている — マラルメの『エロディアド』上演をめざして(2)、『大阪音楽大学研究紀要』第47号、2009、25-41、査読有
- ③ 中畑寛之、マラルメの「批評詩」とはなにか?、『関西フランス語フランス文学』第14号、2008、80-91、査読有
- ④ 中畑寛之、私はここでその幻影を観ているのか? — マラルメの『エロディアド』上演をめざして、『大阪音楽大学研究紀要』第46号、2007、55-71、査読有

〔学会発表〕(計4件)

- ① 中畑寛之、声と身体の間 — ベケット、マラルメ、ジャリ、関西マラルメ研究会第13回研究発表会、2011年3月29日、神戸大学
- ② 中畑寛之、マラルメと第三共和制、シンポジウム「ステファヌ・マラルメとその時代」、2010年3月23日、東北大学
- ③ 中畑寛之、マラルメの「批評詩」とはなにか?、日本フランス語フランス文学会関西支部大会、2007年12月1日、大阪大学
- ④ 中畑寛之、神リヒャルト・ワーグナー — マラルメの〈夢想〉をめぐる、日本フランス語フランス文学会秋季大会、2007年11月15日、関西大学

〔図書〕(計1件)

- ① 中畑寛之、『世紀末の白い爆弾 — ステファヌ・マラルメの書物と演劇、そして行動』、水声社、2009、662

〔その他〕

ホームページ等

関西マラルメ研究会アルシーヴ

Mall' archives

http://www.geocities.jp/mal_archives/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中畑 寛之 (NAKAHATA HIROYUKI)

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：70362754

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者